

考現学的「一切しらべ」の学際性と応用性

濱千代 早由美

はじめに

文化人類学・民俗学、社会学などの分野では、調査者自身が現地に赴いて調査対象である社会や集団に加わり、そこで起こっている事象を観察し、資料を収集する、いわゆる「フィールドワーク」を行うことが多い。フィールドワークは、文化人類学の技法として誕生し、人文社会科学系分野のみならず、地質学、生物学などでも用いられる研究手法である。フィールドワークはデータ収集のために行うものであるが、先入観を排してものを見ること、「メタ認知」の意識化、情報処理、問題発見と解決などのトレーニングとしての有効性も持っている。

この有効性を共有することを趣旨とし、平成30年度第2回帝塚山大学人間環境科学研究所シンポジウム(2019年2月28日)において、フィールドワークの手法の1つである「考現学」的調査を疑似体験するワークショップ「超高齢社会の考現学 『一切しらべ』の学際性と応用性」を行った。本稿は、参加者からの質疑の一部に答えるための補論である。

質疑内容は、研究手法そのものについての興味・疑問、研究方法の応用性に関するものに大別できるように思う。そこで、考現学とその関連分野の研究方法についての議論を概観した上で、本ワークショップの狙いと位置づけを示し、応用・実践例を提示したい。

1. 今和次郎と考現学

考現学的「一切しらべ」

「考現学 Modernology」は、大正末期に今和次郎(1888～1973)らによって提唱された。「社会の表層に現れた風俗を採集し、比較して現代人の生活様式を考察する⁽¹⁾」ものである。今和次郎という人物を一言で説明するのは難しく、その興味の対象は、民家から始まり、都市の現代習俗・モノ、衣服など多岐にわたる。まさに「生活の一切」に目を向けた人物と言えよう⁽²⁾。

考現学は、現象の表層を見る非参与観察によって、主として都会に住む現代人の生活振り、その集団の表面に現れる世相風俗をありのままに観察記録しようとする。生活という現場(フィールド)を調査する「フィールド科学」である。フィールドワークは、文化人類学の技法として誕生した。文化人類学のフィールドワークが異文化を対象として展開されてき

(1) 川添(1999:520)。

(2) 主要業績は、『今和次郎集 1-9』(ドメス出版、1967-72年)にテーマ毎に収録されている。

た⁽³⁾のに対し、考現学のフィールドワークは産業化された都市の世相、街頭風俗に注目した点に特色がある。

今は表面に現れるものの観察を重視し、徹底的に視覚にこだわった。一方、文化人類学では、参与観察を行い、「民族誌 ethnography⁽⁴⁾」をまとめるのが、学問的アイデンティティであると言っても過言ではない。参与観察とは、研究対象となる社会や集団の内部にメンバーとして参加し、生活や活動をともにしつつ、社会や集団の視点にたって調査を行う調査手法である。それに対して、第三者として客観的に対象を観察する方法を、非参与観察という。参与観察においてはインフォーマント（話者）とのやりとり・コミュニケーションがつきもので、「言葉と耳による調査」という性格が強いが、今はスケッチを中心的手法とし、「目による」非参与観察を行った。

今は、このような「生活の一切」に目を向けた悉皆調査を、「一切しらべ」と称した。機械的に対象を記録し、客観的に風俗を採集し、特定の場所と場合におけるすべての要素を調べ上げる。定点観測・定時観測も特徴として挙げられる。そして、採集したデータを「人の行動に関するもの」「住居関連のもの」「衣服関連のもの」「そのほか」に分類し、統計的に多様性と差異を析出するのである。今は、徹底した細部への目配り、観察、記録によって、対象についての漠然としたイメージを問い直していった。

しかし、このような手法を用いる場合、調査開始時点では調査の目的が定められないことも多くなる。このことは、ときとして「目的不明」「理解に苦しむ」「体系化しない点の集積」など、学問としての疑問視にもつながった。

「考現学」をどうとらえるか

先入観を排すということは、「目的不明」「体系化しない点の集積」という状態からスター

(3) 異文化を研究する文化人類学、自文化を研究する社会学という区分は絶対的なものではなく、現在の文化人類学においては、いわゆる「未開」社会の異文化にとどまらず、都市社会や自文化に目を向けた研究が展開されている点には留意されたい。

(4) 「民族誌 ethnography」には、「民族」という語が当てられているが、フィールドワークの対象を「ある特定の民族集団」に限定するものではない。その内容は、「フィールドワークの成果をまとめた報告書（モノグラフ）」に限定されるものではなく、「フィールドワークという調査の方法、あるいはその調査プロセスそのもの」という意味も含まれる。佐藤郁哉（2002）によれば、「エスノグラフィー」は、海外では一般的な用語として通用しており、「フィールドワーク」より現場調査の報告書や調査プロセスそのものを指す言葉として使用される傾向が強くなってきているという。「エスノグラフィー」の方が、動物行動学や地学などの自然科学系学問領域と差異化が図れること、調査技法というだけでなく「調べかつ書く」というプロセスに関する技法であることも鮮明に表現できることなどがその理由である。

トする場合があるのは当然とも言える。しかし、科学的であるためには、特定の理論が必要で、ある理論に基づいた演繹的なものでなければならないといった「学問的常識」からすれば、研究室や実験室からではなく、フィールドからはじまる帰納的方法は、理論構築の手段にはなり得ても、学問とは言えないということにもなるだろう。もちろん、記述にとどまり理論構築に至らなかったり、反証が出来ないならば、この批判はもっともなものである。しかし、誤解してはいけないのは、考現学を含むフィールドワークは、データの採集だけで終わるものではないということである。

「考現学」は、「〇〇学」という名称を冠してはいるが、研究態度の表現ととらえるのが適切である。今自身にとっても、考現学は実験的なもの、あるいは「運動」だった。考現学は大正後期から昭和の戦前期にかけて盛んに行われたが、やがて姿を消していく。これを惜しんだ考現学復興の気運は、「日本生活学会」（1972年～）創立につながった。今和次郎の興味を一言で言えば「生活」である。そのことは、「日本生活学会」という名称にも見て取れ、現在の学会会員の専門分野も多岐にわたっている。この学会では、考現学を方法論の1つとし⁽⁵⁾、多彩な学問的立場（家政学、社会学、文化人類学、民俗学、歴史学、福祉学、経済学、建築学、道具学など）から、人間と生活に対して学際的、かつ、総合的で包括的なアプローチをとることが前提となっている。

2. 写真を用いた疑似調査

ワークショップは、今和次郎が確立した「目によるしらべもの」と「耳と声による応答」を交えた形で行った。参加者は、筆者自身のフィールドワークの予備調査段階で撮影した写真を観察し、そこにうつっているものを記述・描写する。素材としたのは、日本の荒物屋とアフリカの小売店の写真である。写真を通して「現象の表層を見る非参与観察」を擬似的に行い、全く異なる社会の小売店の比較を行ったわけである。

記述（description）とは、ポイントを整理し、データが示す事実を的確に押さえることを指し、思考の材料は当該データのみとなる。見えるものを言葉でスケッチするのである。ワークショップでは、記述したものを参加者同士で参照し合う時間が取れないため、口頭で描写することを中心とした。

ワークショップで用いた【写真1】～【写真3】から分かるように、店内の様子は雑然としており、ありのままに記述・描写することは難しい。実際のフィールドワークにおいては、そこにあるものに焦点を合わせ、店の主人と会話を交わすことによって徐々に雑多な店内の秩序を見いだすという作業が伴う。フィールドでのやりとりを疑似的に再現するため、筆者が店主に成り代わって、参加者の「これは何？」という問いに答えた。したがって、厳密な意味での考現学的調査にはなっていない。考現学の特徴は徹底した客観的観察と全体的

(5) そのほかの方法については、『生活学事典』（日本生活学会編、TBSブリタニカ、1999）などを参照されたい。

把握と比較にあるので、この点は維持した上で現実的な方法を疑似体験していただいた。

講義で同様の素材を用いてワークショップを行う場合、「うつっているのは何か」「うつっているのはどんなところか」を探ることからはじめ、KJ 法なども用いてデータを整理・分析し、何を調べるべきかという「問い」の発見まで進める。今回は、時間の関係から、第一段階のみの実施とした。素材として用いた写真は、以下の通りである。

①「荒物屋」の店内の観察

まず、日本の事例として、三重県多気郡明和町で撮影した写真を用いた。明和町は松阪から伊勢に至る途中にあり、旧参宮街道の面影が残っている。これらの写真（【写真1～3】）は、2001～2003年に『明和町史民俗編』の編纂事業にあたって実施した調査の際に撮影したものである。筆者は「参宮街道の暮らし」の執筆のため、住居学を専門とする学芸員と共に街道沿いの民家を悉皆調査し、1935年（昭和10）当時⁽⁶⁾の復元地図を作成するとともに、対象年代の建築様式、住まい方を残している民家について間取り図を作成し、街道の暮らしについて聞き書きを行った⁽⁷⁾。

町史編纂のための調査が開始された当時、民俗編であるにも関わらず、街道と言えば江戸時代の参宮道者が徒歩で行き交っているというイメージに基づいて、フィールドワークが行われてしまう空気があった。しかし、それでは「現代の民俗」とは言えない。少なくとも経済成長期前後の様子は、聞き書きを行って把握する必要があった。そのため、重点的に調査すべき民家を選定するために、イメージに左右される「ロコミ」に頼らず、「一切しらべ（悉皆調査）」を行うことから始めた。

ワークショップで使用した写真は、この予



【写真 1】



【写真 2】



【写真 3】

(6) 『齋宮村郷土誌』（齋宮商工会編集・発行）巻末の商工会所属商店・事業主による広告と付き合わせて検討するため、発行年である1935年を基準とした。

(7) 濱千代（2004）。

備調査中に店舗の壁三面を撮影したものである。撮影された店舗は、現在営業を終えているが、1935年に発行された『齋宮村郷土誌』（齋宮商工会編集・発行）に「菓子・荒物雑貨・釣具販売」として広告が掲載されている店舗である。調査実施時は、菓子の販売は行っておらず、「荒物屋」が店の性格を最も表す表現であった。

荒物屋とは、日用雑貨を扱う店で、そこで扱われる品物には、その地域のニーズがよく反映される。この取り扱い内容が2001年までにどう変化したのかは、現地で観察してみないとわからない。荒物屋の商品は、地域のニーズに合わせて小ロットで仕入れられ、デッキブラシと梅酒の瓶と便器カバーが同じコーナーに並べられるような（【写真1】参照）、店主にしか分からない秩序で陳列されていることも多い。店主にしか見えない法則に従って並べられた、一見無秩序に見える「モノの集合」を前にしたとき、調査者は今和次郎的に「見えるもの」をひたすら目で採集して、比較し、関連性を見いだす作業をするしかないのである。しかし、尋ねて行った先で、無言で作業を続けるという失礼なことはできない。そこで、店主と会話を交わしながら、秩序を探っていくのである。

②アフリカ（カメルーン）の小売店の観察

次に、先入観を持たず未知の社会を観察することの疑似体験のために、アフリカの例を用いた。海外調査の場合、渡航前の準備（予防接種、ビザの取得など）のために、全く準備をしないというわけにはいかない。対象地域についての基本文献には目を通しているのが前提である。しかし、文化人類学のフィールドワークでは調査の単位は「国」ではなく「民族」「村」などであり、事前に現地語を習得することは難しく、先行研究があるとは限らない。現地に行ったとしても地図が入手できるとは限らない。調査許可証も現地で取得せざるを得ない場合もある⁽⁸⁾。

素材としたのは、1999年に実施した、中央アフリカの都市（カメルーン共和国の北西部州・バメンダ）におけるフィールドワークの導入段階で撮影した写真である⁽⁹⁾。調査を行うにあたって地域の概要を把握し調査方針を決定する、きわめて初期段階で撮影を行った写真を用いて、日本の荒物屋で行ったように、「われわれ」とは異なる秩序や分節体系を探る疑似体験を行った。日本であまり紹介されることのない地域ではあるが、小売店の写真を用いることによって、日本の荒物屋で観察した経験を活かしてみようという趣旨である。

(8) 調査許可の申請・取得などの事務手続きは、渡航前に終えなければならない場合もあり、対象地域によって異なる。

(9) 科研費（基盤研究（A）（2）「アフリカにおける伝統王国の社会変化の比較研究 ―とくに国民社会形成との比較において―」課題番号10041017、代表者：嶋田義仁）による共同研究に、研究協力者として参加することによって可能になった調査である。その成果については、濱千代（2001a、2001b）。

3. 調べることについての議論

理系的？ 文系的？

今回のワークショップでは、理系分野を専門とする参加者から「理系的な発想と異なる」という感想があがった。しかし、今は、自然科学、中でも生物学の標本採集との対比を好んで用いた。不特定多数の人の日常的な行動を動植物の採集手法にのっとった徹底的な直接観察によって記録（採集）し、定量化（統計化）することで、その背後の意味をすくい出すのである。考現学が理系的か、文系的かと問われれば、理系的な手法なのである。

今回は、実際のフィールドワークに近づけて、インフォーマントとのやりとりを含めた方法で実施し、時間的制約から定量化の段階まで進めなかったため、今の提唱した「理系的」採集とは異なる部分がある。しかし、特に調査の初期の段階では、対象をトータルに把握しようとする姿勢は変わるものではない。

質的調査と量的調査の二項対立を越えて

フィールドワークを伴う人文社会科学分野では、「調べること」、またその分析方法や記述方法に関する議論は、フィールドワークを伴う分野において、盛んに議論されてきている。

文化人類学、社会学は共に人間や社会を扱う。文化人類学はもちろん、対象によっては社会学においてもフィールドワークや調査を行う。その場合の調査とは、アンケート調査などを実施し、統計的処理を伴う量的調査と、観察や聞き書きを行い数量化されない（しにくい）データを収集する質的調査に大別される。客観的な数値データに基づき、誰でもほぼ同じデータが得られ、統計的解析も可能な量的調査に対し、質的で帰納的な調査では、主観的な現象に関して聞き書きを行い、テキスト化したデータを解釈するという手法をとる。この手法は職人技的な部分があり、調査者の技量によって、そのデータの質が左右される。しかも、標本数が少なく、その標本は母集団を代表するとは言えない場合もある。このような主観的な質的研究は、科学ではないと断じられる場合もある。

このような質的／量的という二項対立を、生産的な考え方ではないとする主張がある⁽¹⁰⁾。佐藤健二は、研究法論議においてしばしばメタ言語として用いられる量的／質的、定量／定性のカテゴリーの有効性にきわめて懐疑的であることを、何度も表明している⁽¹¹⁾。また、量的研究方法をとる研究者の中にも、「仮説－検証型」のプロセスを機械的に繰り返すだけでは、何も証明したことにはならないと主張する研究者⁽¹²⁾、「計量的モノグラフ」という手法を用いる研究者が存在する⁽¹³⁾。ひとつの研究で質的研究法と量的研究法を混在して行う「mixed methods research（混合研究法）」を用いる場合もあり、研究対象と研究の段階に

(10) 佐藤郁哉（2001）、佐藤健二（1996、2003）など。

(11) 佐藤健二（1996、2003）など。

(12) 尾嶋（2001：7）。

(13) 古川（2003）。

応じて最適な手法を用いることは、珍しいことではない。

民族誌に対する懐疑

また、1980年代の文化人類学では、「民族誌 ethnography」を巡る様々な問題が議論された。かつては現地へ赴き調査を行ったということが、民族誌の正当性を保証するものだったが、1986年、ジェームズ・クリフォードとマイケル・フィッシャーの編著である“Writing Culture (邦題『文化を書く』)”が出版され、表象の力学の暴露・解体が起こった。特に、異文化を対象とする文化人類学は、常に対象の理解と解釈、「われわれ」の文化に即した翻訳をとまなう。現地に滞在してフィールドワークを行ったからといって、本当に「彼ら」のことが「わかった」と言えるのかということが問われることになった。そして、local cultureは壊れやすくて近代化とともに壊れていくもので、調査によってそれを救出して保存するという考え方は、思い上がりではないのかという民族誌的リアリズム批判、客観主義、実証主義に対する懐疑がわき起こった。この議論は、堂々巡りに陥る側面も持ちながら、調査研究を行う上での諸問題を研究者の共通認識にした。

対象をどう分類するかという「カテゴリー化」も重要な問題となった。このことは、質的調査のみの問題ではない。たとえば、質問紙を用いて量的調査を行う場合、ダブルバーレル質問やあいまいな質問は禁忌であり、これを避けるためには調査対象の「分類」について十分に時間をかけて検討する必要がある。

事前準備の是非

「調査地被害」という言葉がある。調査者と被調査者の間の互酬性によってフィールドワークは成り立つが、調査される側が、調査されることによって迷惑を被る場合がある。フィールドワークを行うことによって、何らかのトラブルが発生するリスクは常につきまとう。したがって、フィールドにおける調査者のあり方については、常に検討・留意すべき課題となっている。

このことは、調査に入る前の事前準備の要不要論にもつながる。貴重なインフォーマントの時間を「素人の自己満足で奪う」ことや、素人ゆえの無礼さは批判されて当然であろう。「表層を見る」という表明は、「浅い」という批判に結びつきうる。しかし、刻々と変化している社会に取り組む場合、緊急性も考慮する必要があり、知らないからこそ見いだせる問題や手がかりがあることも事実である⁽¹⁴⁾。

先入観を持たないためには、事前にカテゴリーを固めすぎることは避けた。しかし、「先入観を持たない」ことは、事前準備をしないことの免罪符ではない。こちらの都合に合わせて調査研究を行うのではなく、「調査対象の求めに応じて」的確な方法と理論を用いるため

(14) あえて「表層」にこだわることの重要性については、町村(2004)などの議論がある。

には、幅広い事前準備が必要であり、戦略が決定されてからの集中力が必要だということでもある。「採集」の段階を踏まえ、説明や解釈の段階に進むためには、当該データの他に、知識や想像力が必要であることは言うまでもない。

「見る」力を鍛える

以上の議論を踏まえて「調べる」ことそのものを考えると、必要となる段階は異なるものの、量的調査、質的調査ともに「見る」力を鍛える必要がある。目の前のものや出来事を見る力を鍛えることによって、見えないものを見る力も鍛えられる。参与観察と非参与観察という手法にしても、どちらかしかやらないのではなく、調査研究の段階や目的に応じた比重の問題である。このような観点からみても、量と質の二項対立は不毛な議論と言えよう。考現学的なアプローチ方法は、質的調査と量的調査をつなぐ手法となり得るのではないだろうか。

4. 応用・実用

このような方法について「おもしろいが、役に立つのか」という声があがる。また、職人芸的で方法論が定まらない危うさも持ち合わせている。フィールドワークの方法的危うさは、消えることはないが、この手法を体験することが有意性を持つ場合がある。以下に、その例を示したい。

2003年の中等教育、社会福祉教育

筆者の通常の講義では、最近の調査で撮影した素材も用いているが、今回実施したワークショップでは、2003年前後の素材を用いた。これには、2003年の中等教育現場の混乱・困惑が背景にある。この点については、時間の関係からシンポジウムでは十分触れることができなかつたので、以下に補足しておきたい。

1999年3月の学習指導要領で「総合的な学習の時間」が創設され、高校では2003年度入学生から年次進行で導入された。当時、キーワードになっていたのが「生きる力」で、自ら課題を見つけ、自ら学び、考え、主体的に意思決定して、自律できる力を意味する。この力を身につける場を、教科学習に限定せず、子どもの身の回りにある生活の中にも広げていくために、「総合的な学習の時間」が計画された。

当時、筆者は博士課程に在籍しながら愛知県の教育大学と三重県の私立大学で社会調査法、文化人類学、社会学の非常勤講師を務めていた。受講者の中には教員免許を取得しようとする学生も多く、大学院には高校教員として勤務しながら社会人学生となった友人もいて、「どう取り組んでいいのかわからない」という学校現場の不安に接することがしばしばあった。

総合的な学習の時間では「生徒が自ら学ぶ」力の養成が求められるが、これは「調査・研究」ということであり、「教員が知識を教える」教科学習とは異なるが、その教え方は教職

課程で学んできていないというのである。勉強会を行う先生方もおられ、筆者は調査実習のティーチングアシスタントや共同調査のコーディネーターをしていた関係から、何度か私的に相談にのるうちに、2002年度第38次名高教教育研究集会（愛知県名古屋市教職員組合主催）において、高校教職員を対象として、フィールドワークの実践、調査結果の分析などを指導する場合を想定したワークショップを行なうことになった。

このワークショップの担当となった3名の先生方とは事前に勉強会を行い、フィールドワークの体験もしていただき、高校教育の現場で活かせるような手法は何かを一緒に考えた。2002年には、外部講師として、地歴科全体にまたがる「文化人類学的」講義を行った。

2003年のセッションには、地歴科、英語科、生物科、化学科などから、それぞれ参加があった。参加者から、全ての科に共通する視点が存在することについての発見があったとの感想が得られた。また、「こちらが導きたい課題に誘導する」ことの是非が話題にのぼった。誘導では「自ら課題を見つけ、自ら学び、考え、主体的に意思決定して、自律できる力」にはつながらない。「自ら」課題を見つけさせる指導の導入として示した実施例が、今回のワークショップである。「こちらが導きたい課題に誘導する」という発想は、科学的であるために「特定の理論に基づき演繹的」であろうとする姿勢が、誤った方向に進んでしまったために生じるのではないかという意見も聞かれた。つまり、このようなワークショップは教員自身のFDプログラムにもなり得るということである。

その後も筆者は、教職課程・学芸員課程が設置されている学部や社会福祉学部において、社会調査法、文化人類学、日本民俗学に関する講義を担当した。社会福祉学部の学生は、介護福祉施設での実習などで、高齢者と関わることも多い。しかし、同じ日本社会にくらしながら、20代になったばかりの学生と高齢者の間には世代間ギャップが存在しており、お互いに「異文化」世界の存在だというのが現実であった。学生がクライアントとのコミュニケーションの糸口を見つけるためには、「見る」力を育てておくことが必要となる。そこで、現場に出る前の事前トレーニングも視野に入れた講義が求められ、考現学的アプローチ方法を必要に応じて講義に取り入れてきた。

大学や生涯学習講座の中で様々な属性の参加者に対して、素材を変えてワークショップを行ったが、同じ写真を見ても、それを見る人の専門分野や属性によって焦点が全く異なる。

【写真1】のような雑多な写真から、社会福祉学部の学生は「介護用の瘦瓶」を真っ先に見つけるし、神道学科で神職になるための勉強を進めている学生は「神葬祭の家で使う祭具」を見つける。農村地域出身の学生は、農作業に用いる道具類を細かい名前や使い方まで即座に答える。家庭で保存食を作る習慣のある人は、梅干しの瓶と漏斗を見つける。留学生は、商品の管理方法に興味を示す。

写真は、何かにフォーカスして撮影したものではない。それを「出来るだけ細かく」見るという条件を課せば、選択的に自分のフィールドに関するものを見つけるのが人間である。また、属性の異なるメンバーでこの作業を行うことによって、サンプルは少ないが、深い「比較」を行うことになる。この経験を通して、人と自分の「見えている世界」が異なること、

様々な要素が複雑に絡み合っただけで世の中が成り立っていることなどに自ら気付いてくれる。また、状況を観察するということが強く意識されるため、現場（民俗学系の学生であれば、フィールドワークであり、福祉系の学生であれば、高齢者との関わりであり、教育系の学生であれば、教育実習など）での不安が軽減されるという効果があった。

今回、2003年のワークショップと共通する素材を用いて行ったのは、今回のシンポジウムで求められた全ての要素が盛り込まれていること⁽¹⁵⁾、また、2003年のそれが教育や福祉の現場（フィールド）からの要請に基づいて計画されたものであることによる。

教育現場での実践

フィールドワークに必要な「見る」力は、ある意味「職人芸」的な部分があることは確かだ、それを教えることは難しい。しかし、社会調査や社会学・文化人類学の演習では、多くのフィールドワーカーがそれぞれの調査経験に基づいた工夫をしているし、その実践を元にしたテキストも出版されている。

たとえば、寺出浩司は、目を使った考現学と、言葉や耳も使った質問紙法を用いた調査や聞き書きをもとにした内容分析を併用し、学生とともに「生活文化論の実験」を行った⁽¹⁶⁾。岩井洋の「キャンパスのフィールドワーク」、「小売店舗の比較調査」、「地域活性化プロジェクト」の実践例は、初年次教育におけるフィールドワークの持つ可能性を示唆するものである⁽¹⁷⁾。関根康正は、社会調査演習において「写真観察法」を実践している。＜「東京」を人類学する＞ために、学生自身が「心動かされるもの」を写真に撮り、写真を手がかりに個別フィールドワークとテーマを決めて解明するという方法である⁽¹⁸⁾。写真を撮る段階では、対象に対する参加は行われておらず、考現学の「採集」の段階に比してもよいだろう。

大学教育のみならず、高校教育における「情報科」「中等社会科」教育での実践例もある。情報科もまた、2003年度の高等学校入学者から必修として新設された教科である。情報科の授業において、人間は時間や世界・空間をどのように区分して生きているのか、日常の時空間認識について文化人類学的視点に基づいてとらえ返すための「時空間情報処理論」とし

(15) 2003年のワークショップでは、室内でスライドを使った模擬調査を行い、KJ法を用いた調査計画の立案まで体験した上で、町に出て調査を行うというプログラムであった。2003年のワークショップに手を加えて、教員免許の取得を目指す学生の多い講義でも実施したが、90分の講義を複数回組み合わせ、いくつかの練習問題を行うものである。今回は、模擬調査の内容を短時間で一通り見たいという要望に応えたため、それぞれのワークが不十分であることは付記しておきたい。

(16) 寺出（1994）。

(17) 岩井（2013）。

(18) 関根（2011）。

て、文化人類学教育を取り入れている濱雄亮の実践例がある⁽¹⁹⁾。また、濱は、中等社会科教育への文化人類学の貢献の可能性も指摘している。歴史的・地理的事象や現代社会の諸事象への「理解」を深めるため、歴史や文化を比較する場合、複数の文化を比較する俯瞰的視点に基づく枠組みを育んできた文化人類学は、その手助けが可能であるとする。また、マスメディアによって切り取られ表象される異文化や、インターネット上の世界各地の文化や歴史に関する断片的情報などを具体例に基づいて指摘することによって、メディアリテラシー教育にも有用であるとしている。

まとめ

先述したように、考現学を含むフィールドワークは研究の方法であり、それだけで学問が完結するわけではない。問い、調べ、考え、問題を設定して、調べ、まとめ、新たな問いを発見するという学問のサイクルの一部と考えるべきである。シンポジウムでは、この手法を用いた研究成果ではなく、通常は公表することのない研究サイクルのごく一部を取り上げ、考現学的「一切しらべ」による認識法の持つ有意性を指摘した。

参考文献

- 石川淳志・佐藤健二・山田一成編、1998、『見えないものを見る力 ―社会調査という認識』八千代出版
- 岩井洋、2013、「フィールドワーク」初年次教育学会編『初年次教育の現状と未来』世界思想社、203-211
- 尾嶋史章編、2001、『現代高校生の計量社会学 ―進路・生活・世代』ミネルヴァ書房
- 川添登、1982、『生活学の提唱』ドメス出版
- 、1999、「考現学」日本生活学会編『生活学事典』TBSブリタニカ、520-523
- 、2004、『今和次郎 ―その考現学』ちくま学芸文庫、2004
- ジェームズ・クリフォード、マイケル・フィッシャー編（春日直・足羽与志子・橋本和也・多和田裕司・西川麦子・和邇悦子訳）、1996（1986）、『文化を書く』紀伊国屋書店
- 今和次郎、1971、「考現学とは何か」『今和次郎集 第一巻 考現学』ドメス出版
- 今和次郎（藤森照信編）、1987、『考現学入門』筑摩書房
- 今和次郎・吉田健吉編、1986、『モデルノロヂオ[考現学]』学陽書房（復刻版）
- 佐藤郁哉、2001、『フィールドワークの技法 問いを育てる、仮説をきたえる』新曜社
- 佐藤健二、1996、「量的／質的の対立的解釈について」『日本都市社会学会年報』14、5-15
- 、2003、「『社会調査ハンドブック』の方法史的解読」『社会学評論』53（4）、

(19) 2011年度に慶應義塾湘南藤沢高等部および中等部において行われた実践例については、濱（2011、2015）。

516-536

- 須藤健一編、1996、『フィールドワークを歩く 文化系研究者の知識と経験』嵯峨野書院
- 関根康正、2011、「フィールドワークへの招待 ―写真観察法」鏡味治也・関根康正・橋本和也・森山工編『フィールドワーカーズ・ハンドブック』世界思想社、13-36
- 寺出浩司、1994、『生活文化論への招待』弘文堂
- 濱雄亮、2015、「中等社会科教育における『文化人類学』教育の意義に関する実践的研究：中高一貫校における試みから」『中等社会科教育研究』第33号、79-87
- 濱雄亮・松原正樹、2011、「フィールドワーク実習の試み―その概要・成果・課題―」『日本情報科教育学会誌』第4号、41-50
- 濱千代早由美、1997、「生活誌」日本生活学会編『生活学事典』TBSブリタニカ、552
- 、2001a、「カメルーン北西部州、バメンダにおけるバフツ首長国文化 ―女性の暮らしを中心として―」『大阪外大スワヒリ&アフリカ研究』第11号（大阪外国語大学外国語学部）、118-146
- 、2001b、「カメルーン北西部州、バメンダにおけるバフツ首長国出身者のアソシエーション ―『マンジョン』を中心として―」『アフリカ伝統王国研究 2 アフリカにおける伝統王国の社会変化の比較研究 ―特に、国民社会形成とのかかわり―』、165-175
- 、2004、「街道の暮らし」明和町史編さん委員会編『明和町史資料編第一巻 民俗・文化財 自然・考古』三重県多気郡明和町、175-209
- 古川徹、2003、「計量的モノグラフと数理―計量社会学の距離」『社会学評論』53（4）、485-498
- 町村敬志、2004、「行きずりの都市フィールドワーカーのために ―『いかがわしき』と『傷つきやすさ』からの出発」好井裕明・三浦耕吉郎編『社会学的フィールドワーク』世界思想社、33-61
- 松田素二、2003、「フィールド調査法の窮状を超えて」『社会学評論』53（4）、499-515
- 宮本常一・安溪遊地、2008、『調査されるという迷惑 ―フィールドに出る前に読んでおく本』みずのわ出版